

# 徳富蘇峰記念館

## 目録

(16)

### 蘇峰とその時代展——明治編

展示期間◇平成十一年一月六日～十二月二十日

## はじめに

蘇峰徳富猪一郎は、昭和三十二年十一月二日、晚晴草堂に於いて九五歳の生涯を閉じた。四十二年前のことである。蘇峰の読破した書籍がいかほど膨大であったか、史料の整理が進むほどに実感され驚嘆を禁じえない。蘇峰は十歳のときまでに「唐詩選」を母親と暗記した。「唐詩選」には唐代詩人、杜甫や李白など百二十七人の詩が四百六十五首入っているが、それを覚えたことは、漢詩のもつ韻が幼少のころから身につく、血となり肉となっていたものと思われる。蘇峰の文章が読み易いのは、このせいであろう。

二宮の徳富蘇峰記念館には九千冊弱の書籍があるが、多くは手沢本で、赤エンピツで棒線が引かれ、誤字は訂正されている。それらは蘇峰の通常の読書法であるが、「勝海舟全集」九巻（昭和三年改造社）に挟まれている「読売新聞」（昭和十一年十一月十日）の切抜には、赤エンピツで「大馬鹿者」「大嘘付」と書いてある。何が蘇峰をこのように怒らせたのか。そこには「西郷・勝会見」「江戸城明渡し」の密議を目撃した唯一の生存者」などの見出しがある。「九州日日」（昭和十二年十月十四日）にも「大嘘ノ例」と赤エンピツでの蘇峰の筆がある。「近世日本国民史」を史料に立脚して書いていた蘇峰は、熱弁を振るう老人の話を信じて報

道している新聞記者に腹をたてたのであろう。また、まことしやかに勝や西郷の会見を見ていたと語る老人に我慢できなかったのであらう。

さて蘇峰が故清浦奎吾の別荘を買いとり「晚晴草堂」と名付け、熱海に居を構えたのは昭和十八年、八十一歳のときであるが、戦時中は山中湖で多く過ごし、戦争終結の詔勅の放送も山中湖の双宜荘で聞いた。敗戦後、熱海の晩晴草堂に蟄居していた蘇峰の楽しみは、読書であった。昭和二十三年夫人を亡くされた折り、「読書があるから大丈夫だよ」と心配している次女の孝子さんに答えられたという。昭和二十七年公職追放解除の後、郷里熊本、水俣や、同志社を訪問すること、晩晴草堂で親族が集まり誕生日会を行うことと共に、秘書塩崎彦市の自宅である二宮の「蘇峰堂」に來られることも楽しみの一つであったようだ。その時には全国から蘇峰を慕う沢山の方々も來られた。母屋の応接間、客間を開放して会場にし、芝生にも席を設け、四百余人の方々が蘇峰先生のユーモアに満ちた話に聞き入っていた。先生のお話で、印象深かったことは、

「私は何が幸せと申しましたが、明治天皇の御代に生きることができたことより大きな幸せは御座いませぬ」

と話されたことである。口演の後、芝生と梅林に模擬店、野だて、酒店などが出され、山水樓の宮田武義氏からは中華饅頭が配られ、赤飯のおにぎり、おでん、けんちん汁、お汁粉など、大鍋でいくつも運ばれるご馳走は瞬く間に消え、父や母、姉や姉の友達、二宮の婦人会の方々がおかわらわでお給仕をしていたことが思い出される。小唄の勝太郎さん、小梅さん、講談師、熊本の瓜生田君子さんの詩吟などの余興もあった。このような最晩年の蘇峰と蘇峰を慕う人々の温かなお祭りのような一日と、明治時代を愛した蘇峰とが重なって思い出される。

今回の展示を用意しながら、蘇峰だけでなく、蘇峰が交際を求め、原稿を願ひ、共に歩んだ人々からも、「報国」の精神と明治を生きたという「誇り」が伝わってくる。九十五歳まで言論人として生きた蘇峰の長寿は、明治という時代を生きぬいた充実した心意気が支えになっていたような気さえする。青年のやる気を引出した明治とは、どんな時代であったのか。

今年の展示は「蘇峰とその時代展―明治編」をテーマとし、

一、民友社創設期

二、日清・日露時代

三、書籍蒐集時代という三つの項目で蘇峰の生きた明治に触れてみよう。

一 民友社創設期

(一) 蘇峰著「将来之日本」

1、明治十九年十月七日、東京で田口卯吉の経済雑誌社から「将来之日本」が自費出版された。二十四歳の蘇峰の文名は天下に広まった。十九年十二月、その成功を機に熊本から一家をあげて上京。井上毅は「将来之日本」を読むために一日役所を休んで熟読、面白い本だとみなに吹聴した。蘇峰の叔母の矢島楯子は、蘇峰一家の上京と時を同じくして、「東京婦人矯風会」を設立。蘇峰は矢島楯子、佐々城豊寿、潮田千勢子などの矯風会会員の働きに後援者のような協力を植木枝盛、島田三郎、巖本善治らと共に行った。

2、「将来之日本」の版權(21cm×27cm) 「第一万五千六百六十三号 版權免許之證 徳富猪一郎著 将来ノ日本 小本一冊 熊本

県平民 柄本伊平 右者明治十九年十月七日ヨリ向三十年ノ間版權免許候也 明治十九年十月七日 内務大臣伯爵山県有朋 印」

3、初版「将来之日本」は、明治十九年十月七日、著述者、熊本県士族徳富猪一郎、出版人熊本県平民柄本伊平、発行所経済雑誌社、印刷所秀英社で出版された。明治二十年二月に再版、三月に三版、九月に四版、二十一年五月に五版が出された。たび重なる再版は、この書を熱狂的に求めていた青年、知識層の存在を身近に感じさせる。再版の「将来之日本序」は田口卯吉と高知中江篤介。「緒言」と「再版の緒言」は著者記。「本書之批評」は島田三郎、小池靖一、尾崎行雄、小崎弘道、矢野文雄。「各新聞批評」毎日新聞・朝野新

聞・時事新報・改進黨新聞・日日新聞・報知新聞・経済雑誌。四版の「将来之日本三版序」は、西京 新島義が加わり、あとは再版と同じメンバ。 「本書之批評」は再版で書いている人たちに末広重恭が追加されている。五版の扉に、「是書所謂蘇翁出世作也」と書き込みがある。将来之日本が世にでた百三年後の一九八九年、アルバーター大学出版から「将来之日本」の英訳がピン・シン氏と松沢弘陽氏によって出版された。アルバーター大学のゼミで使われていると聞く。

(二) 「民友社と久保田米僊との「仮契約」書―明治二十二年十月」

民友社ハ久保田米僊ヲ聘シテ図画ニ関スル主筆トナシ、ソレ文ノ優待ヲナス可シ。

久保田米僊ハ図画一切ノ事ヲ編輯主任者ト協議シ、ソノ責ニ任ス可シ。

民友社ハ実俸トシテ毎月七十円ノ報酬ヲナス可シ。

新事件ニ関スル画報ヲ掲クルニ付キテハ、久保田米僊ハ編輯局員ト協議ノ上自カラ其ノ実地ヲ探検スル事アルヲ要ス。但シ東京市外ハ民友社ヨリシテ旅費ヲ給ス可シ。市中ト雖トモ非常特別ノ場合ハ上二同ジ。

久保田米僊ハ民友社外ノ新聞、雑誌、小説等、指画等ニ関シテ執筆セザル可シ。

但シ民友社ノ承諾ヲ得タル上ハ此ノ限りニアラス。

画ハ平均毎号二箇ヲ掲ク可シ。其ノ画幅ノ大小疎密ハ一ニ當時ノ必要ニ恰当スルヲ期ス。

併シ特別ノ場合ニ於テハ此ノ限ニアラス。

民友社ハ久保田米僊ノ外他ノ寄稿画ヲ掲載シ、若クバ西画ヲ掲載スル事アル可シ。

久保田米僊ハ明治二十三年一月十五日迄ニ東京民友社ニ来着ス可シ。民友社ハ一月分ノ旅費、俸給合セテ五十円ヲ給ス可シ。

本契約下変換スル迄ニハ此ノ仮契約ヲ以テ効力アルモノトス。  
以上条件双方承諾ノ上茲ニ後日ノ証トシテ記名調印ス。

明治二十二年十月十四日

民友社 徳富猪一郎 印

右同日調印ス

久保田米儔 印

民友社社長徳富蘇峰とこのように正式な契約を結んで社員になった人は他にいなかったのではなからうか。内田魯庵、宮崎湖処子、国木田独歩、国木田収二、深井英五、山路愛山などとの契約書はいまのところない。

(三) 「民友社・国民新聞社年譜」明治二十年二月十五日—三十四年

十一月二十七日。手書き。26 cm × 19 cm 和綴帳

民友社創立十五年を記念して製作されたもの。簡単な記述であるが、新たにわかった事実は多い。明治三十二年八月十九日、民友社商号登記が提出された。三十三年七月、東京市公告を「国民新聞」に掲載することを以て公告式と定める旨東京市参事会東京市長から通達があった。三十四年四月、本社敷地地上権仮登記がなされた。民友社創立十五年に登記したことになる。

明治二十年二月十五日「国民之友」第一号発行。七月民友社を赤坂区榎坂町五番地より京橋区日吉町二十番地に移す。明治二十三年、民友社を日吉町二十番地より同町四番地に移転す。「国民之友」「国民新聞」の発行停止や、職員員の退社の様子などがわかる。

「国民之友」第三百七十二号（八月）

「極東」第三十号（七月）

「家庭雑誌」第百十九号（八月）

この三雑誌を明治三十一年八月十五日に廃刊し、之を「国民新聞」に併せることにした。

明治二十三年から三十四年までの「国民之友」「国民新聞」の発行停止と責任者の入獄の様子は表で紹介しよう。

(表 1) 13頁

(四) 「手帖」五冊 明治二十年一月から二十七、八年頃

1、手帖 一 14・7 cm × 9・5 cm 緑色の表紙。背表紙と四隅に赤紫色の布で補強した大型の手帖。

明治二十年綜合雑誌「国民之友」創刊に際し、蘇峰は実に多くの人に面会している。「国民之友」が「政治・社会・経済及文化の評論」と銘打つにふさわしい人々の原稿を集めるには、積極的に交際を求め、人脈を開拓しなければならなかった。蘇峰は「将来之日本」の好評を名刺がわりに、誠実に精力的に人々を訪問し、面会し、原稿を依頼して歩いた。その様子が、手帖にみえる人名と住所に示められている。当時蘇峰、湯浅治郎、人見一太郎が主な社員で、それだけに積極的に人材を外に求め、「国民之友」を話題の豊かなものにしようとしていた様子が、この手帖によってわかる。経済雑誌社の田口卯吉の名が最初の頁に見える。西園寺の名が見えるのは「国民之友」の創刊号を見た西園寺が、「何やらソシアリズムの臭いがある」と感想をもらした時のものであろう。二葉亭の名が見えるのは「将来之日本」に感激して長文の手紙を携えて蘇峰を訪れた頃（明治20・8・25）のことであろう。

蘇峰が多くの洋書を丸書を通して欧米に注文し、民友社々員や翻訳を手伝ってくれる友人に貸していた活気が窺われる。蘇峰の金銭の貸借に対する几帳面さもよく示されている。「将来之日本」の発行人に名を出している柄本伊平からも「将来之日本」の代金三十銭を受け取っている（「将来之日本」は五十銭であったので二十銭引である）。上京後の蘇峰が熊本の政治の動向に注目していたことは、手帖にある熊本在住の人名グループによって推察される。

手帖の文字は赤鉛筆・青鉛筆・墨書・朱書といろいろで、めまぐるしい蘇峰の活動が頁ごとに感じ取れる。

2、手帖 二 10・4 cm × 7 cm 茶色皮表紙

明治二十年頃は女性解放論が盛んで、多くの婦人雑誌が創刊され、女学校が新設された。蘇峰も女性解放運動に無関心でなく、「国民之友」三号から五号にかけて「日本婦人論」を執筆した。その原案となったものが第一から第十まで書きつけてある。「文学会」について蘇峰が書いているものはこの手帖と、「明治文献史料」(文学会関係巻物)。酒井雄三郎が明治二十二年一月パリに赴く前に、「文学会」に招待されていたことが手帖に見える。同志社大学設立の募金活動で面会した政治家・実業家等の氏名は、「蘇峰自伝」を裏づけ

3、手帖三 8・8cm×5・6cm

板垣退助の名がみえるのは議会開設直前における大同団結のため、自由党と改進黨の間に立って動いていた蘇峰の行動の一端を示すものである。中江兆民の住所を「麴町準町五番」「表神保町六番地」「小石川区柳町廿九」と移転するたびに書き付けてあるのは、二十二年頃の兆民と蘇峰の交遊の深さを示すもの。「自由教育・自治教会両者并行邦家万歳」と書いてあるのは、新島襄が死の間際まで願っていたことを書き付けたものと思われる。蘇峰が新島の伝記を書く時には「家ニアル秘書ヲモ見セツ可シ」と新島が言ったと手帖にある。新島の死後新島の草稿が未亡人八重子によって蘇峰に送られた(八重子の明治23・3・5書簡)。新島が同志社問題で頼りにしていた松方正義のことなど。

4、手帖四 8・8cm×5・6cm

明治二十三年十月三日から使い始めているので、第一議会直前から使用された手帖。植木枝盛・島田三郎などの名がみえるのは、二十三年自由党と改進黨の中に立って蘇峰が大合同に力を入れていたことを示すものか。政治の活動で多忙な最中にも洋書を諸氏に貸している様子がみえる。北村透谷に「エメルソン伝・エメルソン論」二冊、アルノルトの「エメルソン論」を貸していたことは、後年民友社から出版した十二文豪の「エマルソン」(明治27・4)に繋がるものであろう。民友社が平民的欧化主義を唱え、欧米の文学の紹介につと

めた裏には、蘇峰の積極的な洋書の購入と、それらを社員、友人に貸していた配慮があった。本が返却された時、本の名と借主の名はエンピツで消されている。

5、手帖五 6・5cm×10cm 途中まで使用

内容は全て鉛筆書。漢詩の習作が見え「秋入平壤戰骨寒」と詠み、戦骨に報いる為にも遼東半島還付にたいする蘇峰の憤慨が読み取れる。内村鑑三の名がみえる。日清戦争に対して、蘇峰と内村が同じ意見であったことは蘇峰宛書簡に明らかである。内村の依頼によって、内村の「英文日本及日本人」が明治二十七年十一月民友社から出版された。

(五) 文学会関係巻物(蘇峰筆「明治文献資料」) 長さ10mの巻物。

蘇峰の手によって手帖二とともに残された数少ない文学会関係の史料。巻物は文学会に関する来信を纏めたもので、年代順に正確に並べられているわけではないが、明治二十一年から二十四年迄の二十九通、十六人の書簡と葉書が収められている。文学会に関する書簡の散逸を防ぐために作られた意図が明らかである。この巻物に収録されている人は、森田思軒、朝比奈知泉、末広鉄腸、中江兆民、山田美妙、依田学海、坪内逍遙、志賀重昂、長谷川辰之助(二葉亭四迷)、幸田露伴、饗庭篁村、大久保連、野口寧斎、矢野龍溪、大西祝、小中村義象。以上十六名。他五十四名出席した人がわかつているが、展示した書簡は場所の許す限り次の十二名を展示した。森鷗外、石橋忍月、宮崎湖処子、菅了法、徳富蘆花、竹越三叉、中西梅花、内田魯庵、淡島寒月、尾崎行雄、尾崎紅葉、井上通泰。この外の人は徳富猪一郎、久米幹文、大槻文彦、湯浅治郎、湯浅半月、織田純一郎、内田遠湖、末松謙澄、高橋五郎、小崎弘道、須藤南翠、横井時雄、矢部新作、酒井雄三郎、落合直文、広津柳浪、森槐南、巖本善治、矢崎鎮四郎、高橋太華、市村瓊次郎、人見一太郎、原抱一庵、斎藤緑雨、石橋思案、川上眉山、巖谷小波、福田和五郎、中村修一、丸山正彦、中井喜太郎、秦政治郎、森貞次郎、飯野忠一、宮崎晴蘭、大槻修二、渡辺(大橋)乙羽、宇川

盛二郎、国分青厓、中根淑。「文学会」に参加した人々は全部で七十名。一回に集まった人は十五人から三十人ほどの小さな会であった。

明治文壇で最初の文筆家の話し合う会、第一回の文学会は、明治二十一年九月八日、三縁亭において開催された。「国民之友」の正月と、夏の付録に作品を発表することが、文壇への登龍門の観を呈するほど「国民之友」は人気を博し、一葉亭四迷訳の「あひびき」、山田美妙の「蝴蝶」、森鴎外の「舞姫」、幸田露伴の「一口剣」、坪内逍遙の「細君」など、後世に名を残している作品が多く発表された。

鴎外の「舞姫」を掲載した「国民之友」六十九号は二万二千部を売り尽くし、「国民之友」の好評によって、明治二十一年から二十三年にかけて「国民之友」時代ともいわれる一時期を築くことになった。その舞台裏には広く知識を各分野に求めた蘇峰の総合的文化尊重の姿勢と、積極的に洋書を購入し、それらを民友社社員及び友人の閲覧に供していた采配があつたことが手帖から窺える。明治二十三年「国民新聞」を創刊するまでに、「文学会」や「国民之友」の特別寄書家などに象徴されるこれら幅広い文筆家たちが、民友社を中心に集まっていたのである。この人脈の内には新島襄の同志社大学設立募金運動のために面談した井上馨、大隈重信、洪沢栄一、益田孝など多くの政治家、実業家も含まれていた。後に文学会が忘れられた一つの原因として、山路愛山、国木田独步、深井英五、平田久、山川瑞三などが民友社に入社したとき、「文学会」はすでに消えていた会であつたからである。以上のような文筆家との繋がりは蘇峰が文学に興味を持ち、自身でも「新日本の詩人」「インスピレーション」などを書いてきたからである。蘇峰が「国民之友」「国民新聞」に書いた随筆、人物論、講演などを集めた「国民叢書」三十七冊が、明治二十四年から大正二年まで次々と出版された。人口四千万人であつた明治二十年代から約二十年間に、「国民叢書」は二百万部売れたという。これは大ベストセラーであつたことになる。地方で塾を開く塾長にとつて、良い教科書であり、生徒たちは「田舎漢」などを喜んで暗記したという森次太郎の手紙がある。国民叢書は、岩波茂雄が昭和四年に文庫本を發

売したより、三十六年も前に蘇峰によつて赤表紙の「国民叢書」として愛読されていた。蘇峰は地方の青年の教育のレベルアップが、鹿鳴館でダンスを踊ることより、何情も文明開化に必要であると思つたのである。これは、勝海舟の考えと同じであつた。「進歩乎 退歩乎」「人物管見」「静思余録」「文学断片」などなど、みな面白い。蘇峰の文学的感性がこの中にある。たとえば「故郷」「明治の二先生福澤諭吉君と新島襄君」「新日本の詩人」「近來流行の政治小説を評す」「文学者の目的は人を楽ましむるにある乎」「言論の不自由と文学の発達」「愛の特質を説いて我邦の小説家に望む」「天然と同化せよ」「好伴侶としての文学」など、蘇峰が文学を愛していた青年だけではないことがわかる文章であり、克己心の強い現実一点張りの青年だけではないことがわかる。以上民友社創立期の様子を蘇峰・森田思軒・朝比奈知泉が主催していた「文学会」と共に見てみた。依田学海の二つの日記「学海日録」「墨水別墅雜録」が出版され、「文学会」についての史料も出つくした感がある。

(六) 民友社社員給料「日誌」明治二十三年一月—二十五年十月 国民新聞社の「元帳」 明治二十六・七年

明治二十三・二十四・二十五年度の民友社編輯員（約十七名）の給料総額が一ヶ月約二百七十円、事務員（約二十一名探報者、集金人を含む）の給料総額が一ヶ月約百三十一円であつた。編輯員の平均給料は十六円、事務員は約六円で、なかなか厳しかったようである。十五歳で国民新聞社の集金係となつた藤村作の「八恩記」（角川書店）には、五円の給料では「弁当料、昼飯代、湯銭等を払えば月々かつかつで、時には集金の金に手をつけたい様な苦しい月も生じた」とある。明治二十三年、「国民新聞」創刊にあたり、読みやすい紙面にするために、先に紹介したように、京都から久保田米僊を月七十円で招いたことは、いかに破格なことであつたかがわかる。蘆花は明治三十年まで十一円であつた。「女学雑誌」社から招聘した内田魯庵は二十五円であつたが、八カ月で止めてしまった。民友社の給料は安かつた。明治二十五

年八月に入社した山路愛山は月給十五円であった。愛山が明治三十年蘇峰から独立して行くことのかきつけの一本は、安い給料にあったことが書簡に見える。「民友社多士齋々、皆薄給に満足す。僕独大金を受くるの理なし。是れ僕が切に地方に出でん事を求むる所以也」(明治30・8・14)。

この他明治二十六年の国民新聞社の「元帳」や、社内を改良するために社員の意見を求めた「意見書」、国民新聞社内で作成されていた種々の「報告書」などによって、国民新聞社、民友社について当時の具体的な動向を知ることができる。

## (七) 『国民之友編輯要録』 明治二十八年一月—二十九年三月

野紙百枚。『国民之友』二百四十四号から、二百八十六号までの四十二冊の『国民之友』の編輯要録。明治二十八年は伊藤首相への攻撃記事が多く、発行停止を二回受けている。国木田独歩の「欺かざるの記」によると、二十八年は独歩が『国民之友』の編輯に従事していた。この頃、独歩は佐々城信子に出会った直後であった。恋愛中の独歩の働きぶりを蘇峰は次のように書いている。「其の後国木田君の様子ががらりと変つて民友社の編輯も校正も手につかない、非常に間違ふ」と。裏表紙の内側には国木田収二の住所がローマ字で書かれている。当時蘇峰は収二の方により多く期待をかけていたという。

## 二 日清・日露戦争時代

(一) 日清戦争 明治二十七年八月一日から二十八年四月十七日。明治天皇の行幸に陪して蘇峰は広島「大本營地」に赴き、自ら特派員を指揮した。その論議と報道とは、「朝野に重きをなし、国民新聞の信用と声望とは頭角を表す」と蘇峰自身が書いている。

従軍記者国木田独歩の「愛弟通信」は評判を得た。久保田米偸の絵画通信は、最も他に先んじて評判がよかつた。米偸は平壤陥落後は帰朝し、

広島大本營にて、御前揮毫の光栄を得た。

川上操六書簡 明治二十七年八月十一日付

拜啓 此頃御依頼有之候久保田氏外二名渡韓之件、一応御請合申候得共能々取調候処、勅令第五三十五号發布後は中々六ヶ敷候に付、渡韓之手続文は各自に於而御運び被下度、その上にて途中及び彼の地に於而は充分御便宜を与ふる事には周旋可致候間、左様御承知被下度、右得實意候也。拜具 八月十一日 操六 徳富兄

従軍記者にもいろいろ規制があつた様子がうかがえる。

内村鑑三 書簡 明治二十七年八月七日付

陳は兼て吾人の翼望せし日清開戦も愈々宣告に相成り、国家の為、人類の為、大悦此事に御座候。就ては承はれば我邦在留の外人にして吾人の真意を解せざるもの有之、我に對し不利を唱ふる者有之候由に付、甚だ拙文ながら我國民の大儀を英文に認め、今日横浜メール新聞迄寄送置候。題は Justification of the Korean War 致し、歴史的に論じ置候。然し今日迄の経綫に依れば、彼記者は論文其儘は掲載せざるやも不計、若し然るときは之を一小冊子となし、(外諸名士の論文を加ふるも可なり、之を広く内外の識者に分布する事は今日の急務と被存候え共、御意見如何に御座候や。何れにしる今日は広く宇内に訴ふべき時にして、吾人の戦争は決して筒先のみには無之事と存候。不省ながら、小生も此任には充分当り度候間、御教訓の程願上候。国民新聞毎々御送り被下難有奉存候。国民之友解停一日も早く望み居り候。彼の人物論は日蓮論を以て初め度、目下草稿中に御座候。拜具 八月七日 内村鑑三 徳富先生 机下

日清戦争の時には内村鑑三は蘇峰と同じ考え方であつたことがわかる。

(二) 欧米外遊 深井英五と共に。明治二十九年五月二十八日から三十年六月二十八日まで。

1、「伊国議會新聞記者傍聴券」(明治二十九年十一月三十日)

2、「チュートニツク号の昼食メニュー」(明治三十年五月九日)

15・8×11・3 二つ折りのカード。大隈重信はかねてから蘇峰が

大食漢であることに驚いていたそうである。蘇峰は西洋に来て、女性にも「喰ひ負けている」ことを、ついでの折り、大隈にお伝え下さいと阿部充家に書き送っている。ロンドンでの大病後の蘇峰がはたして鮭オードブル、ロブスター、牛肉ステーキ、小羊、小鴨、プディング等の料理をどれほど楽しめたであろうか。

3、「蘇峰を紹介した諸外国新聞記事」(明治二十九年六月—三十年六月)

香港、シンガポール、イギリス、ロシア、コンスタンチノープル、フランス、サンフランシスコ、ハワイ。切抜は、無造作に『家庭雑誌』七十八号に貼つてある。全部で二十六編の記事がある。ロシアの新聞「オデスキー・リストーク」(広瀬亨訳)は、「この日本のジャーナリスト達は英語・ドイツ語・フランス語で自由に意志を表示し得る」とある。ここにロシア語が入っていないのが面白い。サンフランシスコの「新世界新聞」は、蘇峰が帰国後、就官することは蘇峰の為にならないと書いている。蘇峰が帰国後に、英国公使、内閣書記官、外務次官になるのかと噂されていたことがわかる。蘇峰の就官問題が、移民の間でも話題になっていたのである。

4、「欧米からの通信」

外遊中蘇峰は実に多くの通信を国民新聞社に草野門平宛で送っている。蘇峰の指示で「国民之友」に十二回、「国民新聞」に百十回掲載された。

この他、社員、家族にしばしば手紙を出している。欧米からの通信は、總めて出版されていない。これは蘇峰にとつて珍しいことである。「蘇峰文選」に「トルストイ翁を訪ふ」は収録されている。民友社社員も多くの書簡をロンドンの蘇峰に送った。海外で受取った日本からの書簡を、蘇峰は持ち帰っている。蘇峰宛書簡がなぜ多く残されたかの精神を見る思いである。

(三) 日露戦争 明治三十七年二月十一日、露国に対する宣戦の大詔下る。

三十八年九月五日、日露講和問題に対して、「国民新聞」は堂々と所

信を公言した為、世間より甚だしい誤解と迫害を受け、遂に九月五日焼討を蒙ることになった。

1、桂からの書簡 三十八年九月五日 封筒表徳富猪一郎君 封筒裏太郎

本日午前以来之都下之情勢遺憾千万なり。午後に至り漸く警察之力不足之感ある故、先以東京衛戍惣督之権限に而取り得らるべき丈け之所置を取らせ居候。明日に至れば更に嚴重之所置に出で、政府の威厳をして遺憾無きに至らしむるの決心なり。右御答迄。且つ社員諸君之勇猛なる決心を承知し不堪感激候也。九月五日 太郎 徳富君 侍史

2、「明治三十八年九月五日十一時、主な在社の面々」18×275 表装巻

物仕立。徳富猪一郎、阿部充家、結城礼一郎、並木仙太郎、松岡彦野、尾間明、草野茂松……六十五名の署名

九月五日、日比谷で講和反対国民大会が開催され、政府系新聞社である国民新聞社も焼討を受けた。徳富猪一郎はじめその日に在社していた六十五名がサインしている。字の勢いから、暴徒に襲われそうな社内の恐怖と、社を守ろうとする彼らの武者振いと感じられる。蘇峰四十三歳の時。

3、日露戦争に従軍した陸軍軍人の漢詩と、漢詩人野口壺斎

野口壺斎は明治二十六年から亡くなる三十八年にかけて病床にありがちで、病氣と戦いながら、病詩人として名を知られた。境遇、技倆、名声ともに結核の正岡子規に匹敵するとして二大病詩人と称された。壺斎は愛国心が強く、戦争を主題に作詩する者が多かったなか、壺斎はこれを選び、批評を加え、「大森余光」と題して出版した。これに採用された主な作家は森槐南、永坂周二、国分青崖、依田学海、落合東郭などの大家で、軍人の中からも、副島種臣、野村靖、田中光頭、山県有朋、乃木希典などの元老で、その諸作も収められている。壺斎は三十六年から漢詩の雑誌「百花欄」を創刊し、自ら編集にあたった。「百花」とは依田学海、巖谷一六、田中光頭、永坂周二、高島九峯、矢土錦山、永井禾原、国分青崖、森槐南、佐藤

六石、落合東郭などである。蘇峰の友人であった人々が殆どである。三十八年の五月十二日、寧齋は脳溢血で亡くなった。後にその死は義弟男三郎と男三郎の妻になった妹そ恵子のからむ殺人事件と疑われ、新聞は興味本位に書きたてたが、蘇峰の「国民新聞」は男三郎の「予審終結決定書」が公表されるまで、六カ月間報道をひかえた。無罪で刑務所から出て来たそ恵子は、蘇峰に礼状を書いた。

#### (四) 野口そ恵子の礼状 明治三十八年十二月二十九日

未だ一度も御目もじは申し上ず候へ共 御高名はかねがね亡兄より聞及び居候 誠に失礼とは存じあげ候へ共 一筆申上候次第 何卒御ゆるし被下度候 扱私入監中 種々根もなき事 諸新聞に出で候にもかかはらず 御社の新聞に限り一向御掲載無之候ひし由これ定めて御許様の御注意によりての事ならんと深く御厚情御礼申上候 亡兄も地下に満足致し居事と存じ居候 就ては帰宅後早速お礼旁御伺ひ申上候筈に御座候へ共 色々取りまき連居候て あまり延引と相成り候まま失礼とは存じあげ候へ共 右書面をもて御礼申上げ候 尚ほ母よりもくれぐれも宜敷申上くれ候様申出候 末筆ながら時季から御身御大切に被遊候様ねんじあげまいらせ候

廿九日 草々 そ恵子 徳富様 御前に

#### (五) 明治三十八年頃の絵葉書 外国からと日本から

明治三十七、八年の絵はがきは戦没者記念など、彩色の美しいものである。凹凸や金粉がほどこされ、写真入りの豪華な葉書は、日露戦争時代の暗いイメージとはかけはなれている。また外国からの葉書も美しく、斎藤茂吉、巖谷小波、吉野作造、小坂順造、留岡幸助、矢島楯子、大西祝などからの絵はがきがある。二百枚余の絵はがきは、日清・日露戦争後の明治の活力を感じさせる。

#### (六) 日露戦争のとき、蘇峰の周辺にも多くの事が同時進行していた。

1、国民新聞社社長蘇峰は多くの従軍記者を現地に送った。

2、桂内閣との関係から講和会議の正確な情報を得ることができ、国民新聞の売れ行きは上昇した。  
3、号外を出したあとの寸暇を惜しんで古本や琳琅閣の座敷で古書を蒐集し気分転換をした。日露戦争時代の本屋の領収書は約四百枚となった。  
4、三十八年三月には島田翰の「古文旧書考」を民友社から五百部出版した。

5、三十八年五月、野口寧齋の死に、妹と義弟がからむ毒殺かと疑う世論に対し、「国民新聞」は十二月「予審終結決定書」が出るまで興味本位の報道をしなかった。監獄からでてきた寧齋の妹そ恵子は蘇峰に、礼状を出した。

6、九月五日講和条約調印。それに反対する国民大会が日比谷公園で開かれ、約五千人の群衆により国民新聞社は焼討に遭う。国民新聞不買運動により、売れ行き減少。  
7、十二月五日蘇峰と絶交中の弟蘆花が三年間の疎遠を詫び会いにきた。

8、明治三十九年五月、朝鮮満州、北清、長江一帯の地を漫遊し八月に帰国。十一月に「七十八日遊記」を出版。その書評。新聞、雑誌の切り抜き。山路愛山（国民新聞）、田川大吉郎（都新聞）、ヨネ・野口（ジャパン・タイムス）などの長文の書評。国民新聞の原稿用紙に貼って、一篇ずつこよりで綴じられている。

### 二 書籍蒐集時代

蘇峰の書籍蒐集は内藤湖南の影響を受け、明治三十五、六年頃から熱が入ってきた。

#### (一) 夏目漱石と蘇峰の共通の知己

明治四十二年二月、横川和尚選「百人一首」が刊行された。是が民友社に於ける古書複製の嚆矢となる。その複製を贈呈した二十三人か



らの礼状の巻物の中に、夏目漱石の書簡があった。他の二十二人は、西園寺公望、釈敬俊、芳川顕正、石黒忠恵、末松謙澄、森槐南、佐藤進、高島張輔、落合為誠、鈴木子順、永坂周二、永井久一郎、田辺新之助、湯浅吉郎、神山潤次、木久正謙吉、渡辺新、徳富一敬、大槻如電、富岡謙三、幸田露伴、森鷗外であった。漢詩の好きな蘇峰の友人たちである。漱石は二月という寒い日にもかかわらず、すぐに読み礼状を書いた。漱石は「日頃私の机の周りに集積する書物は、ことごとく生存競争の臭いがするが、久しぶりにこのような雅集に接し、荒野で一碗の香り高いお茶を飲んだような心地がする。私は俗用に追われ、静かに遙か、未来を思いやることさえできない。復刻本を実行なさった貴方へ感謝します」と礼を尽くした手紙を書いた。

漱石と蘇峰の共通の知己は漱石の書簡集と「蘇峰宛書簡目録」から調べ、百二十六人がわかったが、展示スペースが可能なだけを表示した。夏目漱石、森鷗外、坪内逍遙、幸田露伴、田山花袋、高浜虚子、落合東郭、尾崎紅葉、平福百穂、釈宗演、杉村楚人冠、関根正直、土井晩翠、中村不折、西村天因、長谷川時雨、村山龍平、水落露石、瀧田樗陰、岡倉天心、森次太郎。

## (二) 鬼才の書誌学者 島田翰

### 1、島田翰略歴

島田翰(彦偵)明治十二年一月二日―大正四年七月二十八日(1897―1915)。東京小石川に生まれる。明治期の書誌学者。漢学者島田重礼(篁邨)の次男。東京外国語学校支那語学科卒業。二十歳の時父を亡くし、遺言で父の同僚(東京大学教授)竹添進二郎に師事し、「左氏会箋」の校勘の手伝いをした。宮内大臣田中光顕の知遇を得て、宮内省図書寮の珍籍をはじめ、さまざまな文庫を閲覧することができた。幼少より漢文に秀で、漢籍を中心とした書誌学に鬼才を示し、二十五歳の時の著「古文旧書考」は、国内のみならず中華民国でも名声を博した。この「古文旧書考」は翰の才能を認められた蘇峰によって、明治三十八年四月民友社から五百部限定出版

された。「国民叢書」一冊が二十銭のとき、「古文旧書考」は三円五十銭であった。

四十一年中国の四大蔵書家の一つである陸心源の旧蔵書を三麥の岩崎弥之助が購入する際も尽力し、蔵書の散逸を防いだ。この時の経過をまとめたものが「碩宋樓蔵書源流考」で、中国で二回も再版され、愛読された。また、清末の考証学者俞樾をはじめ中国の漢学者にも認められ、尊敬された。昭和の書誌学者長沢規矩也氏は、翰が「古文旧書考」の中で、偽書を捏造したと指摘し、翰の校勘学を否定したが、「古文旧書考」の中国での評価は高く、初版から六十二年後の昭和四十二年にも台湾で再々版された。「古文旧書考」は今日から見ると訂正を要する部分も少くないと云われているが、なお名著の名に恥じないと言われている。

翰は、書籍を無断で持ち帰ってしまい、足利学校の「論語事件」や、金沢文庫称名寺の「文選集註」流出に関係し、傲慢な態度がよけいに信用を失い、刑事事件となった。入獄が決まった大正四年七月二十八日に、横浜の某所でピストルにより自殺した(遺族の話)。翰の一族は母の祖父が儒学者塩谷宕陰であり、兄・義兄など有名な漢学者揃いの名門であった。永井荷風とは同じ年の竹馬の友で、東京外国語学校でも同窓であった。同級生には文求堂の田中慶太郎もいた。蘇峰は翰の蔵書の一部を大野洒竹の紹介で、明治三十六年十二月六百円で買い、それは蘇峰の「成賞堂文庫」の蔵書の基礎の一部となった。田中慶太郎によって編集された「訪余録」が死後出版された。翰は二度結婚し、二男四女の父であった。

2、「雲烟過眼録」を見ると、蘇峰が書籍を探す喜びは胸の踊るようなものであったことが伝わってくる。「雕板の新古、精粗、醜美、善悪の如き、あに問を要せんか」と云っていた蘇峰が、たちまちそのとりこになっていく様子が面白い。そのような状態の蘇峰が出会ったのが大野洒竹であり、島田翰であったのである。蘇峰は稀少価値のある宋本の鑑定や見分け方を翰に教えてもらった。翰は「古文旧書考」出版の礼に、蘇峰にいつかは宋本を贈るといいながら、つ

いに死ぬまで実行しなかった。蘇峰に贈ると約束していた宋本は、めぐりめぐって内藤湖南の文庫で蘇峰に対面したという。蘇峰は内藤湖南が持ち主でよかったと書いている。

### 3、島田翰著「碩宋樓藏書源流考」。

中国で四大蔵書家の一人である陸心源没後、陸心源の全蔵書を静嘉堂文庫に購入させた縁の下の力持となった。その経過を書いたものが「碩宋樓藏書源流考」。

### 4、その他の展示もの

(1) 島田翰著「古文旧書考」四冊 漢文。明治三十六年翰二十五歳で書きあげた最初の著書。「古文旧書」という表現は、漢代孔子の宅を改修したとき、壁のなかから出てきた書籍の総称として用いられているもの。内容は日本に流出したり、伝来した中国の古籍の刻本や日本で出版された旧刊本や古抄本を調べなおし、誤りを正したもので、三十八年三月民友社の蘇峰によって五百部出版された。

(2) 「寒山寺詩集」島田翰校・兪曲園跋・竹添井井序 明治三十八年七月二十日、民友社より五百部出版された。清末の考証学者兪曲園が「古文旧書考」を褒めた序文が掲載されている。

(3) 「訪余録」島田翰遺稿。大正十年翰の七回忌に親友であり、外国語学校同級の田中慶太郎によって出版された。漢文。二十九枚の小冊。翰の気持も書かれているので貴重な史料。

(4) 「宋版説文正字」蘇峰旧蔵の珍書。昭和二十七年琳琅閣主人の古稀記念に東京古典会から百五十部影印された。蘇峰の祝辞あり。島田翰の有名な「島田翰読書記」の印が押されている。美しい彫りとは云えないが、独特の印。

(5) 島田翰書簡 明治三十八年四月三日付。長文「寒山寺詩集」の復刻を願っているもの。手紙の最後に「書物少々は売行申候哉 心痛致居候」と売ゆきを心配している翰の姿がある。

(6) 島田翰考証文 二篇 明治三十六年十二月二十八日付の手紙に同封。「嶋田氏考証文」と蘇峰の筆で書かれた茶封筒に入れて保存。

(7) 徳富蘇峰宛六百円の領収書 島田翰 明治三十六年十二月十九日

### 5、島田翰関係展示書簡

(1) 田中光頭の書簡。宮内大臣光頭に認められ、いろいろの文庫の書籍に触れることが出来た。

(2) 大野洒竹の葉書。俳人、医者。蘇峰に翰を紹介した人。

(3) 内藤湖南書簡。東洋学者、大阪朝日新聞の記者。恭仁山莊主人。蘇峰に書籍の蒐集家になる影響を与えた人。

(4) 大槻如電書簡 明治三十八年五月五日「さてさて壮年に及ばぬ人にして、かかる者あるは白頭赧顔之至に候。裝潢考は深く感服いたし候へども、雕版考は全く感服いたされず、各編につきては深感服と不感服とあり。さりながら「深」多くして「不」は少きは矢張感服と申候より外無之候。拙老は更に感服申上候は、此の書を蘇峰君が開雕なされ候にあるなり。本書は考証家には必要の書なり。好事者には必読の書なり。然し今日の世用には、甚だ遠き者にてさのみ必要も無し。然るに重資をなげうたれしぞ、拙老の甚だ感服致し候所なれ。蘇峰君も好古之癖ありて古書研究は御同好よりとは存じ候へども、島田氏の精神に感動されて此挙に及びし者と存じられ候」

(5) 白須直電報。「デンシンカワセニテ スグ ゴヘンキンヲコウ」翰は明治三十八年の秋、蘇州の日本領事白須と共に蘇州の兪樾を訪ねた。翰は白須から250ドルを借りたが、なかなか返さなかつたようで、日本に帰国後、白須の返済を願う手紙と電報は十一通に及んだ。

(6) 服部宇之吉書簡。封筒なし。翰の姉繁子の夫。漢学者。北京大学に招かれる。米国ハーバード大学の教授。西洋哲学の礼の思想を研究。

(7) 市村瓊次郎、考證学に秀で、東洋学会を創設。翰が「古文旧書考」を謹呈した。

(8) 蘇峰書簡(角田浩々歌客宛)。明治三十八年三月三十一日「兄貴に古文旧書考を贈る。内藤湖南君と各一部づつ。願くは貴兄は読売新聞にて充分のご批評を被成度候。小生は此の書の為めに小生の身分不相応の金を浪費し候。これは著者の志を悲しむと共に、古書の

消滅を悲しめば也。此れは全く営利にあらず道楽也。道楽の二文字中に真の味あり。文人同志の事なれば何卒同情を以て御納ありたし。兎も角も御手に入りたらば是非御一報を乞ふ。この書簡は荊木美行氏の著書『古代史研究と古典籍』の中に蘇峰自筆書簡として掲載されていた。『古文旧書考』を出版した蘇峰の気持がわかる貴重な書簡に出会え、幸いであった。角田は慶応義塾卒の評論家で、「大坂朝日」「大阪毎日」「東京日日」などの文芸評論家であったので、蘇峰は宣伝を願ったのであろう。

(9) 揚守敬 蘇峰への為書 明治。清末民国初期の学者。日本からの逸本を中国に持ち帰った。翰が「古文旧書考」を謹呈した人。

(10) 清浦奎吾 蘇峰への為書 明治。書簡。第一次桂内閣の司法大臣。蘇峰、竹添と同郷。

(11) 井上哲次郎書簡。哲学者。翰が「古文旧書考」を謹呈した。「新体詩抄」を外山正一らと刊行。

(12) 岩崎弥之助葉書。実業家岩崎弥太郎の弟。明治四十一年翰の交渉で、陸心源の遺族から函宋樓藏書を散逸することなく、静嘉堂文庫に將來した。

(13) 吉田忽采書簡。漢詩人。国民新聞で「古文旧書考」の書評を書いた人。

(14) 岩崎小弥太 弥之助の子。実業家。翰が月百五十円で、四年間ばかりで静嘉堂文庫の書籍の校勘をさせて欲しいと願った人。

(15) 山田三良書簡。翰の親戚。

(16) 山川健次郎書簡。物理学者、教育家、東大総長。翰が裁判にかけられたとき、翰のために法律には但しがあると情状酌量の働きかけをした。

(17) 長沢規矩也書簡。昭和期の書誌学者、翰の校勘を認めなかったが、翰の鬼才に興味を持った。成貴堂文庫の整理を川瀬一馬と手伝った。

(18) 反町茂雄葉書。古書肆の大御所。翰に会った事はないが、田中慶太郎から色々話を聞いていた人。弘文荘の主人。

(19) 湯浅半月葉書。詩人。京都府図書館長。「古文旧書考」を日本全国の大学・図書館に供えるべきだと云った人。

(20) 重野安繹書簡。岩崎弥之助の師。儒学者。静嘉堂文庫に百宋樓の書籍を入れる最後の交渉をした。

(21) 除乃昌書簡。中国南京から直接翰に「古文旧書考」を褒めた手紙が来ている。

(22) 田中慶太郎書簡。東京外国语学校支那語学科で同級。翰の影響で支那専門の書肆になる。翰の親友。翰の遺稿を「訪余録」にまとめ出版した。

### (三) 大谷光瑞と二楽荘

明治四十三年九月、蘇峰は京城日報監督の任に当たることを依頼される。

この役のために、大正七年七月まで一年に二回から三回東京、京城間を往來する。この間『近世日本国民史』のための史料集めや、山口県を尋ねたり、大谷光瑞の建てた二楽荘をたびたび訪ねる。同志社にも立ち寄り演説をしている。またその間書籍購入を記録したノートが多数ある。光瑞と蘇峰の關係は、明治三十六年、大谷光瑞の父光尊が亡くなったとき、光尊が蘇峰を光瑞の友人、指導者とするように遺言したからである。日露戦争にたいして、蘇峰はジャーナリズムの方面から、光瑞は宗教方面から援助した。

光瑞が六甲山の裾野の小山の上に建てた二楽荘は、明治四十一年三月に着工し、翌四十二年九月に竣成した。二楽荘は神戸沖で沈没した英国商船を引上げてその素材を利用して造られたもので、奇抜な外観が人目を引いた。光瑞はしばしば蘇峰にその廢物利用を誇っていたという。二楽荘は須磨の月見別邸が官内庁に買い上げられた資金で建てたものであるが、従来別邸とあまりに異なる二楽荘を、まわりの人は光瑞の道楽・浪費と感じ快く思っていなかった。六甲の山頂から、海と山の二つの景観を楽しめるので「二楽荘」と名付けたという。邸内にはインド室、支那室、アラビア室、エジプト室、英国封建時代

室・近代室などの部屋を設けた。光瑞は夜の二楽荘や各部屋の絵はがきを作った。温室ではメロンが栽培され、蘇峰の家族も味わったという。六甲の斜面にはケーブルカーが造られた。

二楽荘の絵はがき十二枚。光瑞の文面のある葉書。武庫中学生一同からの絵葉書二枚。光瑞が造った寄宿舎のある学校。

光瑞書簡とシルクロードの手書き地図。橘瑞超の「砂漠漫遊記（桜蘭の捜索）」と「タクラマカン沙漠横断」。

橘瑞超の明治四十五年六月六日付書簡。「此の杖は奇なる歴史を有し、高昌の故地を徜徉せしとき、古墳を発掘せしとき、窟中に蔵せり。墓誌により合考ふるに、延昌卅年庚申閏月十九日に葬とあり、何人なるや知らざれ共、実に一千五百四十年を経過せり。蓋し死者の常用せしものならんか、不浄の物の如く思ひ候へ共、古物に相異なき故、先生に進呈仕候。死者と先生と又如何なる関係ありや知らざれ共、一奇遇と存候。他一杖は桜蘭故城跡の付近にありし檉柳に御座候。幹強くして質軽亦散策に適するものなり。沙漠の地、素より風雅の品なし。微小の品物に御座候へ共、御笑納被下候はば、小生の光栄に御座候」発掘品である杖を蘇峰に進呈する手紙であるが、いくら世話になった蘇峰にとはいえ、千五百四十年前の墓から発掘された杖を、蘇峰個人に進呈することを瑞超に許したことは、発掘物を私有物と考えていた光瑞の姿勢の一端を示すものといえよう。

大谷光瑞が進呈した千五百四十年前のミイラが持っていた杖を、何故蘇峰は受け取ったのであろうか。蘇峰は「大谷光瑞師の生涯」のなかで発掘品の散逸を嘆いているが、蘇峰自ら杖は返すべきであったと思う。杖のかつての所有者のミイラは現在（昭和九年時点）旅順の博物館にあるという。昭和九年、蘇峰は瑞超にこの杖について、手紙でいろいろ問い合わせしたらしく、瑞超の返事がある。杖の行方は当館の史料ではわからない。杖をとられたミイラが気の毒である。大谷光瑞と蘇峰の互いに尊敬仕合った交遊は光瑞の二百四十通余の蘇峰宛書簡にみえる。蘇峰が京城日報の監督をしていたときの、東京と京城間の往復状況を表にして紹介しよう。

(表2) 14頁

(四) 明治三十七、八、九年古書領収書 約四百枚

三年間の古書籍の領収書が年ごとにこよりで綴じられて、茶封筒に無造作に入れられていた。蘇峰の蔵書には、購入した年月日と、どこで幾らで購入したか、エンピツで書かれていて、領収書が貼られているといわれる。

当館の書籍には、領収書が貼られていないので、高価な本だけに貼られていたのかもしれない。約四百枚の領収書に書いてある書籍名を書き写してみたが、読めない字が多かった。書籍名は薄い大学ノート四冊になった。日露戦争中であるこれらの書籍の領収書は、蘇峰のりフレッシュの場合が古書店であったことを示すものとして面白い。

(表3) 15頁

(五) 「京城日報」関係資料

明治四十三年十月一日、京城日報の監督を依頼される。明治四十三年十月一日「新聞に関する取決書」寺内正毅

(六) 四十四年八月桂太郎の推薦で貴族院議員に勅撰される。四十九歳の時

(表1-①)

『国民之友』発行停止と責任者の入獄の様子

——明治23年～34年——

- 1 明治22年11月3日～12月15日 67号発行停止
- 2 ♪ 27年7月16日～8月14日 232号による
- 3 ♪ 27年10月23日～11月22日 239号による
- 4 ♪ 28年1月24日～2月末日 245号による
- 5 ♪ 28年4月13日～6月12日 『国民之友』編輯人中村修一、伊藤首相に  
関する論文の為入獄
- 6 ♪ 28年4月23日～6月3日 251号による

(表1-②)

『国民新聞』の発行停止と責任者の入獄の様子

——明治23年～34年——

- 1 明治23年10月 『国民新聞』発行人兼印刷人頼娃孝之助、  
編輯人渡辺政徳入獄
- 2 ♪ 23年10月11日～11月8日
- 3 ♪ 24年1月10日～1月17日
- 4 ♪ 24年5月18日～5月24日
- 5 ♪ 24年9月13日～9月27日
- 6 ♪ 25年3月3日～3月24日
- 7 ♪ 26年2月15日～2月19日
- 8 ♪ 26年5月 『国民新聞』発行人兼印刷人田上直入獄
- 9 ♪ 27年1月30日～2月10日
- 10 ♪ 27年5月8日～5月21日
- 11 ♪ 27年6月7日～6月9日
- 12 ♪ 27年7月18日～7月23日
- 13 ♪ 28年3月17日～3月21日
- 14 ♪ 28年4月15日～4月18日
- 15 ♪ 28年5月17日～5月28日
- 16 ♪ 28年5月22日 『国民新聞』前署名編輯人三輪米蔵入獄
- 17 ♪ 28年9月7日～9月15日
- 18 ♪ 29年5月5日～6月19日 『国民新聞』署名編輯人金子佐次郎入獄
- 19 ♪ 29年11月18日～11月21日

[注] 年譜より作成。年譜では28年4月15日が『国民之友』となっているが、  
実際には『国民新聞』が発行停止となっている。

(表 2)

## 蘇峰の東京と京城の往復状況

	年 月 日	随行者	備 考
1	明治43年9月14日-10月16日	ナシ	寺内正毅総督(大正5年10月1日まで)。吉野太左エ門社長兼主筆(大正3年8月まで)。「新聞整理ニ関スル取極書」(明治43年10月1日)。児玉、山県(伊)、明石、菊池、林市蔵、宋秉峻等と会う。
2	明治43年12月1日-12月11日	ナシ	帰路二楽荘訪問。
3	明治44年1月7日-1月16日	ナシ	帰京後桂邸に報告 晩餐。
4	明治44年5月15日-6月28日	ナシ	群山、西湖津等旅行。帰京後桂邸に報告。
5	明治44年10月7日-10月31日	ナシ	往路正倉院を見学、二楽荘訪問。釈宗演一行、野田大塊等に会う。帰京後桂邸に報告。
6	明治45年1月5日-1月18日	ナシ	帰路二楽荘訪問。
7	明治45年4月14日-4月29日	ナシ	往路同志社にて演説。帰路二楽荘訪問。帰京後桂邸に報告 午餐。
8	大正元年10月4日-10月25日	ナシ	往路同志社にて演説2回、二楽荘訪問。龍山の地所8200坪購入。釈宗演、金允植等に会う。
9	大正2年1月4日-1月13日	ナシ	帰路同志社にて演説、二楽荘訪問。帰京後桂と会見。
10	大正2年6月3日-6月22日	ナシ	小説「十年」中止の電報来る。社新築のこと。宋秉峻等と会う。
11	大正2年10月20日-11月18日	西村	「合資会社京城日報社設立ニ関スル契約書」(大正2年11月8日)。健次郎、愛子、鶴子来る。帰路二楽荘訪問。帰京後桂公霊前焼香、後藤邸に行く。
12	大正3年7月16日-8月5日	西村	阿部充家社長兼主筆(大正7年6月まで)。朴泳孝、李完用、趙重応等に会う。(大正3年5月、父洪水死去)
13	大正3年10月13日-10月25日	西村	京城日報社新築移転(12月)。林市蔵、趙重応、李完用、野田等と会う。
14	大正4年3月11日-3月23日	西村	帰路萩の桂公の菩提寺及び松陰神社に取材。
15	大正4年7月30日-8月16日	西村	
16	大正4年10月4日-10月22日	西村 綱島	市原盛の葬式の為赴く。金剛山探勝。(大正4年11月、火災の為、木造煉瓦造り三階の日報社社屋の一部焼く)
17	大正5年3月10日-3月24日	西村	京城日報経営に関する「意見書」を寺内正毅に提出(大正5年3月13日)。寺内の「答弁書」受取る(大正5年3月20日)。総督府政務総監山県伊三郎との「覚書」(大正5年10月13日)。
18	大正5年10月28日-11月15日	西村	長谷川好道総督就任(大正5年10月16日から大正8年8月12日まで)。
19	大正6年4月1日-4月24日	松岡 万熊	毎日申報発展意見書を提出(大正6年4月15日)。山県伊三郎と会見調印交換(大正6年4月17日)。朝鮮内旅行。
20	大正6年9月15日-9月24日	伊達源 一郎	支那漫遊途上、京城日報社に立寄る。(「支那漫遊記」による)。
	大正7年6月		蘇峰、京城日報及び毎日申報の監督を辞任。

(表 3)

## 明治36年～40年の本屋の領収書

		枚 数	金額 (円)
1	浅倉屋文淵堂 吉田久兵衛 (東京市浅草区北東仲町5番地)	26	130
2	暗心堂 池上梅吉 (神田区表神保町1番地)	1	21
3	磯部屋書店 (麹町区麹町4丁目13番地)	36	1,261
4	大島屋 武田伝右衛門 (東京市神田区仲町2丁目6番地)	4	22
5	太田亀三郎 (佐久間町2丁目17番地)	1	5
6	河井書籍店 (本郷区湯島切通坂町24番地)	6	18
7	開蔭堂 細川清助 (京都市三条寺町西江入)	9	291
8	其中堂書店 (名古屋門前町)	3	21
9	国華社 (東京市京橋区弥左衛門町10番地)	1	15
10	近藤活版社 (東京市麹町区飯田町5丁目26番地)	2	53
11	酒井藤兵衛 (東京市神田区淡路町2丁目4番地)	62	646
12	島田 翰	1	600
13	松雲堂 鹿田静七 (大阪市東区安土町4丁目)	13	451
14	松山堂書店 藤井利八 (東京市神田区錦町1丁目10番地)	8	31
15	松山堂書店 藤井利八 (東京市京橋区南伝馬町1丁目18番地)	20	154
16	裳華房 芳野兵作 (東京市日本橋区通2丁目18番地)	2	37
17	中村善次郎 (芝区琴平町3番地)	3	43
18	野田書店 (神田小川町7番地)	7	105
19	文求堂書店 (東京市本郷区本郷3丁目10番地)	13	245
20	文行堂書店 (下谷区東黒門町2番地横尾)	22	77
21	文光堂 森田書店 (東京市麹町区麹町5丁目3番地)	23	166
22	文詳堂 澤田書店 (本郷区湯島切通坂町5番地)	9	30
23	丸善株式会社 (東京市日本橋区通3丁目14番地)	3	150
24	丸屋書店 (横浜市弁天通2丁目28番地)	1	16
25	村上正太郎 (京橋区丸屋町2番地)	3	53
26	村口書店 (東京市神田区裏神保町6番地)	27	375
27	村田幸吉	6	11
28	擁万閣山口屋 森江佐七 (東京市麻布区飯倉町5丁目赤羽橋際)	2	8
29	聖華房 山田茂助 (京都市下京区寺町通6角南12番戸)	2	11
30	弘文館 吉川半七 (東京市京橋区南伝馬町1丁目)	1	7
31	琳琅閣 斎藤兼蔵 (東京市下谷区池ノ端仲町22番地 元錦袋円跡)	63	1,628
32	春和堂 若林書店 (京都市寺町通御池北入)	1	186
33	その他、読み方不明	13	657
	合計	394枚	7,524

坪内 逍遙	M28・1・2付葉書
	M21・9・6付葉書
寺内 正毅	M44・7・11付
土井 晩翠	S21・12・17付
	観音画絵葉書
	東郷平八郎 軸
徳富 一敬	M44・軸
徳富 蘇峰	M29~30
	外国からの通信
	草野門平宛
	M38・3・31付
	角田浩々歌客宛書簡
徳富 蘆花	M30・1・8付
	軸仕立
留岡 幸助	M35・12・2付
	絵葉書 ドイツより
	M36・10・25付
	絵葉書 ロンドンより

な

内藤 湖南	M38・6・20付
	M38・7・7付
	絵葉書
長沢規矩也	S6・2・8付
中西 梅花	M24・9・23付
中江 兆民	M23・10・7付
中村 不折	昭和の書簡
夏目 漱石	M42・2・9付
新島 襄	明治の書簡 帖仕立て
	軸 蘇峰賛
	S21・3・23
新島 八重	M23・3・5付
西村 天囚	T9・9・22付
乃木 希典	M41・5・25付葉書
	軸 蘇峰賛
	S15・11
野口 寧斎	M23・10・6付
野口そゑ子	M38・12・29付
野村 靖	M41・10・29付

は

橋本 雅邦	明治期の四季山水
	画 晩年の秀作
長谷川時雨	S11・5・4付
服部字之吉	T( )・( )・7付
原田直次郎	『国民之友』の表
	紙画
人見一太郎	M27・8・13付
平田 久	M(27)・7・(2)付
平福 百穂	M41・8・2付
	百穂の絵入り葉書
	M( )・6・4付
	百穂の絵入り葉書
深井 英五	M27・11・(15)付
福地源一郎	軸 M25夏
二葉亭四迷	M21・9・7付葉書
古谷 久綱	M34・12・3付
	絵葉書 ロシアより

ま

松方 正義	軸
水落 露石	T7・10・9付
三宅驥一 (他3名)	
	M42・11・14付
	絵葉書 ベルリンより
宮崎湖処子	M29・12・3付
村山 龍平	M( )・3・18付
武庫中学生一同	M45・5・( )付
	二楽荘絵葉書
元良勇次郎	M38・1・1付
	絵葉書 ベルリンより
森 次太郎	S20・2・1付
森 鷗外	M23・9・29付
森田 思軒	M22・3

や

矢島 楫子	M27・8・21付
	M29・11・8日付

絵葉書 ワシントンより

矢野 龍溪	M23・8・8付
八代 六郎	M37・4・29付
	絵葉書
山県 有朋	M(42)・2・7付
	軸 蘇峰賛 S28
山川健次郎	S2・4・10付
山路 愛山	M30・8・14付
山田 三良	T14・12・18付
山田 美妙	M23・9・9付
山室 軍平	M37・6・8付
	絵葉書 紅海より
	M42・4・2付
	絵葉書 モスクワより
山室 宗文	M41~42
	大統領の絵葉書
	アメリカより
湯浅 治郎	M18・5・2付葉書
湯浅 半月	M39・8・17付葉書
楊 守敬	軸 明治
横井 小楠	江戸期の書
与謝野晶子	S6・3・11付
吉野 作造	M44・1・1付
	絵葉書 ドイツより
吉田 勿来	M39・5・15付
依田 学海	M21・10・8付



## 平成十一年度 展示書簡一覽表

あ		
青木 周蔵	M29・8・20付	
饗庭 篁村	M23・8・7付	
朝比奈知泉	M21・10・9付	
阿部 充家	M□・4・27付	
淡島 寒月	M26・1・付葉書	
安中 植	軸「山水画」為書	
石橋 忍月	M21・9・21付	
市村瓊次郎	M43・7・17付	
伊藤 博文	M35・6・23付	
井上 通泰	M23・5・3付	
井上 毅	M26・3・8付	
井上哲次郎	M23以降10・19付	
岩崎小弥太	T4・11・15付	
岩崎弥之助	M30・8・8付	
巖谷 小波	M34・12・1付	繪葉書 ベルリンより
	M35・12・1付	繪葉書 ベルリンより
植木 枝盛	M20・3・9付	
潮田千勢子	M22・7・23付	
内田 魯庵	M23・5・31付	
内村 鑑三	M27・8・7付	
大隈 重信	M30・10・13付	
大槻 如電	M38・5・5付	
大西 祝	M31・3・28付	繪葉書 ナボリより
	M31・3・23付	繪葉書 スエズより
大野 洒竹	M37・11・14付	
大谷 光瑞	M38・6・10付	
	M44・9・12付	地図同封
	S22・6・3	最後の手紙
岡倉 天心	M36・5・29付	

尾崎 紅葉	M25・1・1付	
尾崎 行雄	M23・10・11付	
落合 東郭	M42・2・20付	
か		
角田浩々歌客	M43・1・31付葉書	
勝 海舟	M24晩秋	軸 為書
桂 太郎	M(38)・9・5付	
兼坂 止水	M21・3・21 軸	
鹿子木具信	M40・7・4付	繪葉書 ニューヨークより
川上 操六	M( )・5・13付	
川端 龍子	S25・蘇峰先生立像	蘇峰賛 S32元旦
肝付 兼行	M28・10・4付	
清浦 奎吾	M39・9・( )付	軸 為書
九条 武子	M( )・4・21付	
国木田収二	M40・8・24付	
国木田独歩・信子	M28・11・6付	
久布白落実	M43・4・7付	繪葉書 シアトルより
久保田米僊	M22・10・14付	(民友社との仮契約書)
	M32・1・3付	米僊の絵入り葉書
公文 菊僊	吉田松陰肖像	蘇峰賛 S29
幸田 露伴	M24・6・6付	
国際記者クラブ日本支部	M42・5・29付	
国民新聞	「明治38年9月5日	11時主な在社の面々」
小坂 順造	M43・6・10付	繪葉書 パリより

	M43・6・14付	繪葉書 ローマより
小村寿太郎	M30・11・27	
児玉源太郎	M32・8・16付	
さ		
斎藤 茂吉	M33・1・1付	繪葉書 ベルリンより
酒井雄三郎	M22・12・12付	パリより
佐々城豊寿	M28・10・14付	
志賀 重昂	M21・5・18付	
重野 安繹	M42・12・11付	
渋沢 栄一	M21・8・( )付	
島田 翰	M36・12・28付	
釈 宗演	M42・2・5付	
除乃昌(島田翰宛)	M38・5・17付	
白須直(島田翰宛)	M39・8・18付	
末広 鉄腸	M23・8・8付	
菅 了法	M20・1・31付	
杉村楚人冠	T3・5・15付葉書	
関根 正直	T3・4・4付	
宋槩蔵経出断片 蘇峰賛	S28・9 軸仕立	
反町 茂雄	S32・10・7付葉書	
た		
高浜 虚子	M43・1・1付	
瀧田 樗陰	T11・11・12付	
田口 卯吉	M21・2・3付	
竹越 三又	M20・6・27付	
橘 瑞超	M45・6・6付	
田中慶太郎	S3・11・6付	
田中 光顕	M42・7・9付	
田山 花袋	M39・9・22付葉書	

# 蘇峰堂 便り

徳富蘇峰記念館は、JR二宮駅から徒歩13分のところにある丘陵を背にした静かな記念館です。一階は常設展示室、二階は特別展示室で、毎年テーマを決め、約100通の蘇峰宛書簡、約20点の美術品（主に軸物）などを展示しています。そして三階は研究室、収蔵庫となっています。

年間の入館者数は決して多くありませんが、それだけに来館者との出会いは心に残るものが少なくありません。

さて、記念館には、臥龍梅一本を含む樹齡300年の古木50本と若木40本のこぢんまりした梅園があり、その中に建つ趣のある書院も雰囲気を添えています。梅の香気漂う二月の梅園では、琴の演奏会、茶会が開かれ、春の光に包まれた穏やかな光景は、蘇峰も愛したという二宮の春のひとつです。

この季節の華やいだ賑わいも三月半ばで終わると、また静かな記念館に戻ります。

梅雨の頃から夏にかけては、年間で最も入館者が少なく、この期間には資料整理に集中します。門の両側の大きな銀杏が色づく秋は「歩く会」の人たちの来館が目立ちます。そして、高く澄んだ青い空いっぱい広がる黄色い銀杏の葉が散り始める頃、私たちは次の年の「特別展」の準備にかかります。こうして一年が巡ります。

人が一生の中で出会う人の数はどれほどなのでしょう。蘇峰宛の書簡は、記念館の収蔵だけで四万六千余通にも及び、発信人は一万二千人を超えます。これだけの人々と交流を持った蘇峰、その「徳は孤ならず」の如くの生涯に圧倒される思いです。そしてこれらの貴重な史料を紹介して又、来館者と私たちが出会います。

今年の特別展「蘇峰とその時代展―明治編―」では、来館者が蘇峰と出会い、漱石・晶子と出会い、植木枝盛・内村鑑三・勝海舟・新島襄、そして野口素恵子や島田翰と出会う！

そんなことを想いながら、訪ねて下さる方を一期一会のころでお迎えしたいと願っています。

和田 千枝

明治という時代が魅力的なのは、そこに国を動かし前に進もうとする人々の躍動感と、時代の大きな機動力を感じるからではないだろうか。平成十一年度特別展「蘇峰とその時代展―明治編―」のための準備をして、途中何度も明治のもつ不思議なパワーに背中を押されるような気がした。そしてこの力の原点には、明治という時代が担った使命感をしっかりと受けとめた、人と人との繋がりがあつたのだと考えずにはいられなくなった。蘇峰宛の書簡からは、志を抱いた人々が、さまざまな分野で協力し合い、はたまた刺激し合いながらその繋がりを広げ、新しく組立て、その中からより一層の原動力を生み出している様子が直に伝わってくる。

「明治という時代に生きることが出来て幸せだった」と語った蘇峰の姿が目につく。昭和に生まれ、現在平成に生きる私は、果たして今の混沌とした時代に何を求めているのか、一体何ができるのか、日々の生活に追われながらも、ふと考えるひとときを与えてくれる展示である。

さて、蘇峰の愛した明治にはなかつた、平成の新兵器・インターネットを利用して、記念館のホームページを制作しました。二宮町の観光ガイドに、記念館のページが開設してありますので、どうぞお訪ね下さい。

宮崎 松代

徳富蘇峰記念館ホームページ

<http://www.surflife.ne.jp/ninomiya>

## 編集後記

今年には徳富蘇峰記念館創立三十周年にあたる。創設者の塩崎彦市が館長であった私設の記念館としての十年、神奈川県第十七番目の博物館に認定されてからの二十年である。その間の理事長と館長は故塩崎マサ子、故榎一雄、現竹越起一である。

今年の特別展示は盛りだくさんで、いままでに整理してきた史料のうち、明治時代に関するものを中心に展示した。雑然としているがこの展示が明治における蘇峰の足跡の一部と思つて見ると、不思議に整然と見えてくる。

平成十一年三月九日から五月九日まで、熊本の近代文学館特別展で「徳富蘇峰展」が開かれる。これは熊本近代文学館の永畑道子館長がかつて二宮の記念館を訪れ、「蘇峰のみずみずしい青春に直面」した感動を熊本の皆さんにお伝えしたいという情熱から実現されることになった。この特別展には、二宮の記念館からも書簡類が約三十点貸出されている。

今年の梅は思いのほか若返り、がんばって咲いている。毎年の牛糞七十袋がきいてきたのである。

昨年度の目録15「蘇峰宛女性の手紙展」で、女性からの手紙は約二千五百九十通、差出人は五百九十人と数えた。その数は間違いないが、女性の手紙が全体の十八%であるというのは、大間違いで、5%が正しい。いつも間違いが多くてすいません。

昨年十月「統蘇峰とその時代」を上梓でき、多くの方々に読んでいただいていたで大変嬉しい。皆様のお寄せ下さった感想を、これからの励みにしたい。

今から十四年前、昭和六十年に「徳富蘇峰記念館所蔵 民友社関係資料集」(民友社思想文学叢書・別巻・解説 高野静子 徳富蘇峰記念塩崎財団編 三一書房)を出版した。五六五頁の大冊で、明治・大正の蘇峰に関する主な史料を活字化し、解説を付した。この資料集を生かし、「表」などはそのまま用い目録16「蘇峰とその時代展―明治編」を作成した。この一年は書類の整理に力を入れる予定である。

学芸員 高野 静子

平成十一年三月十八日発行

編集 高野 静子

発行者 竹越 起一

発行所 (財)徳富蘇峰記念館塩崎財団

〒五九九〇二二三 神奈川県中郡三宮町三宮六〇五

TEL 〇四六三二七一一〇二六六

FAX 〇四六三二七一〇六七七